



丘陵地に建つ新しいシンボル中央棟。右手に見える直方体は、桜並木と教育ゾーンをつなぐ大エスカレーター。

2008年版朝日新聞社「大学ランキング」で全国2位に輝いた食堂棟。ケヤキ広場の景色を楽しみながら食事ができる。



新世紀のキャンパス

*Campus of New Century*

# 追手門学院大学



学生は正門から200メートルの桜並木を通して教育ゾーンへ向かう。

学院創設以来の面影を残す大階段。前方の森は敷地内にある古墳で、新たな教育の場として2007年度以降整備予定。





中央棟ロビーは、一歩足を踏み入ると美術館にいるような感覚。内装にも樺色の木材をふんだんに利用した。

2006年度に創立40周年を迎えた追手門学院大学は、教養教育と実践教育を柱に、時代に合わせた教育改革を進めてきた。「優れた教育にはそれにふさわしい美しく機能的なキャンパスを」との観点から、キャンパス整備5ヵ年計画を推進中だ。

「計画のコンセプトは大きく3つ」と語るのは、高尾 典史副学長だ。宮本輝氏の小説『青が散る』の舞台にもなった特性を生かしつつ、遊び心のある個性的なキャンパス作りに努めた。まず一つめは「学生にとって快適なキャンパスとすること」。それには、無秩序だった建物の配置を見直し、エントランスゾーン、教育ゾーン、学生ゾーン、スポーツゾーンと、機能

ーションの空間』とすること」。キャンパスの新しいシンボルとして、1本の桜の木をモチーフに建設された中央棟は、6号館とともに桜の幹を思わせる樺色の外壁材で仕上げられている。ここには、従来の「研究室」でなく、学生と教員が相互交流できる「教育型オフィス」を設置。広さも以前の2倍の面積をとり、最大20名で研究ができる空間を確保した。

三つめは「6号館は大教室であるとともに様々なイベントに使える最新の設備を備えること」。555人収容可能の大教室「優勝ホール」と3つの400人教室は、授業以外に学会や地域住民参加の講演会など、多目的に使えるスペースとなっている。

環境配慮にも優れている。たとえば中央棟は東西が全面ガラス張りなので、東に京都、西に大阪の街を一望できる抜群の眺望である反面、室内温度が外気温に左右されやすい。これを防ぐため、ダブルスキン(2重窓の中にブラインドを挟むシステム)を採用した。また各階の天井には「風の道」と呼ばれる天井ダクトを使用し、室内からの排気を取り込み、自然風により建物外へ排気している。外階段にはムース缶の廃材であるパンチングメタル壁面を使用。さらに、6号館の屋上庭園のケヤキ広場をはじめ屋上緑化を多く採用するなど、随所に環境配慮が見られるのが特徴だ。

廊下側もガラス張りにした教育研究室は室内の様子がよくわかる。外光が入る明るい廊下は省エネ効果も。



図書館には宮本輝ミュージアムを併設。閉じられた図書館の概念を崩す吹き抜けの空間とした。



2006年グッドデザイン賞を受賞した守衛所。ここが新しい正門となった。

松下幸之助氏寄付をもとに建てた茶室を改修し、モダンな枯山水風庭園に。



スタジアムを思わせる円形教室は先生との距離が近く感じられる。「特に優れた人」が多く出てほしいとの思いから「優勝ホール」と名づけた。